

資料a



海部 宣男氏

「日本の星めぐり」の旅の最後に、主要な著者による講演会・座談会の記録をもとに、まとめの記事をお届けします。日本人がどのように星空を見上げ、そこに何を感じ、理解してきたのか…。その魅力と可能性をさまざまな視点から考察し、日本人の星空への思いとその変遷を探訪してみましょう。

●このコーナーで日本の星の魅力を語り合うのは、北尾浩一氏、茨木孝雄氏、嘉数次人氏、海部宣男氏、後藤明氏の5名です。



後藤 明氏



北尾 浩一氏



嘉数 次人氏



茨木 孝雄氏



2017年10月7日に三鷹ネットワーク大学で開催されたアジアの星プロジェクトとの共催による講演会のようす。北尾浩一氏、茨木孝雄氏、嘉数次人氏による各講演と座談会が行われた。

座談「日本の星めぐり」―その魅力を語り合う
日本人が見てきた星空



01 ■神様の星空と生活の星空

○嘉数…まず、茨木さんの講演（80ページ参照）を受けて、星に対する畏敬の念について。神様も例えば日本古来のものと中国から渡来したものとありますがね。混ざり合っているところもあると思います。そういった中で日本の起源的なものの特徴といったものはありますか。

○茨木…今回は日本神話に登場する星に関係がある神様ということで、特に星の輝きといいますが、光に対する畏れに注目したわけですが、外、外国の神様、たとえば道教系の神様はいっぱいいるわけです。ただ、余りそれはポピュラーにはならなかったと思います。やはり民衆にとっては、理解が難しいということもあつたと思つたのです。

仏教も妙見信仰が入ってきたのは比較的古いと思いますが、北斗の星の一つに破軍星があるため、武家がそれを擁護してかなり広まったわけです。でもその後、廃れてしまつたのです。それを再興したのが日蓮です。ですから妙見信仰と言つても、これはもともと、古代中央アジアの砂漠や草原に住んでいる遊牧民族が、夜間移動するときに目安とした北極星を信仰したものが、中国を通じて伝わってきたので、だとするとそれは日本人にとってはさほど関係のないことで、多分そういう意味では廃れてしまった。やはり、民衆に受け入れられるには、どれだけ御利益があるかにかかってくるので、北極星や北斗七星を信仰する妙見にしても、明星を化身とする虚空蔵にしても、わかりづらかったのではないかと思います。月待もそうです、実

際に月が出る時刻と関係なく終わってしまったりしますから。星も同じです。節分のころに星祭や星供ってありますよね。いろいろなお寺でやっていますが、そこで和尚さんが「外へ出れば夜空に北斗が輝いている…」と、でもその時刻には出ていなかったり…。つまり実際の星を見るものではなく、あくまで信仰の教義上のことなのです。

○嘉数：おもしろいですね。星を見ないで星を信仰する。とすると、星の信仰の源流を求めて歴史を遡っていくと、古くから神道的なもの、中国から入ってきた妙見、そして虚空蔵菩薩ならん仏教系と、それらが複雑に入り混じって、調査は難しくですが、北尾さん、和名についてはどうですか。

○北尾：もともと和名は、語り手が主役なので、わずかな例外を除いて文字の記録を持ちません。文字を使える人と、文字を持たない人の交流が深くなったのは、江戸時代ぐらいからの話です。だから、平安時代中期の辞書『倭名類聚抄』には、スバル、イヌカイボシなど、本当に限られた和名しか掲載されていません。これが、江戸時代になるとたくさん辞書、随筆たとえば『四方の硯』などに出てきます。「星象を見ることは、農民よりくはしきはなし」というような記述も見られます。また、もともと古い信仰から名づけられた「九曜星」が時代を経るにしたがって「すばる」に言い換えられるようになった例もあります。さらに、新たな和名が登場する場合もあって、例えば「上等兵星」はオリオン座の三つ星のこと。これは明治生まれの人から聞いたのですが、もとは「からすき星」といった違う和名で呼んでいたものを、わし

ら若い者は上等兵星と言うのだと。これは近代的な軍隊ができて初めて生まれた比較的新しい名まえですよ。

ということ、言葉というものは常に時代とともに生きながら変化していくものですから、星の名まえもどんどん入れ変わっていきます。つまり星の和名というのは失われ、生まれ続けてきたものです。その意味では、文字によって固定された形で残ったものはほんの一部で、そのルーツをたどるのは、やはり容易ではないですね。

○嘉数：なるほど。言葉だから生活スタイルによってどんどん変わっていくものですね。では、時間軸をさかのぼる試みとは別に、今度は平面的な視点で、実際のフィールド調査などについて聞いてみたいと思つたのですけれども、北尾さん、例えば「すばる・すまる」の分布など、地域的な名まえの変化から、何か見出せるものはありますか。

○北尾：大きな括りでは西日本を中心に「すばる」文化がある。東日本中心に「六連」系統がある。奄美大島、喜界島よりも南の広い意味での琉球文化圏に行くと「群れ星」系統がある。古い形としての「七つ星」というのは一部、大分などに残っている。さらに人の流れによって、例えば同じ青森県の中でも津軽半島には関西の方から人の流入があったので、すばるから派生して「スバリ」「シバリ」「ヒバリ」になったりしますけれども、そういうものが分布しています。

○嘉数：北前船による人の移動ですか。

○北尾：そうですね。さらにおもしろいのは、六連が東日本に多いとはいっても、宮城県から右手県

あたりでは、これが本来のすばる、つまりプレアデス星団ではなくて、オリオン座の三つ星と小三星の呼び名に変化している。そして、その地域では「おくさ」が、すばるの和名として記録できる。これは、同じ和名が異なる星々に言い換えられてしまった例です。各所で生まれた和名が、人や文化の交流によって地域的・空間的にさまざまな変容を受けているわけですね。

も一つ大事な点として職業的な偏りがある。同じ海岸部でも例えばカノーブスというのは漁師の集落にあっても農村の集落にはない。唯一、例外的に奈良県にカノーブスの和名があるので、これは驚きですが、おおむねカノーブスが漁村部で伝えられている傾向がある。ほかにも、例えばさそり座のアンタレスと、αの3星を「鯖売り星」と呼ぶのは結構農村部が多いけれども、ふたご座のカストルとポルクスの和名は漁村部が多いとか、そういった特徴があります。

○嘉数：今度は地域的な変化を見ているわけですが、おもしろいですね。北前船の影響で関西地域の星の和名が津軽のほうにあったりとか、そういう和名調査から、かつてその時代にどのような人の動きがあったのかがわかるというのは…。歴史の生き証人みたいなところがあると思います。茨木さん、星の信仰においてもそのような地域分布から見えてくるものはありますか。たとえば、降星伝説はどこそこ多くてとか、月の神様はこのあたりに集まっているとか…。

○茨木：降星伝説に関して言えば、それは虚空蔵にしても妙見にしても山岳地帯です。妙見山とか

オリオン座の三つ星は「みたらし団子」の星なのです。

●星の和名の特徴は、生活のなかで形成され、身の回りの日常的なことがらに密着したものが多くことです。また、ギリシャ・ローマ神話をもとに作られた西洋の星座のように、たくさんの星々をつないで大きな星座を作ることはず、比較的小さな天域に集まった特徴的な星の配列に注目しているのも和名の特徴です。たとえば、オリオン座の三つ星やプレアデス星団（和名の「すばる」）などです。さらに配列（星座）にさえなっていない一つの星に強い関心を寄せて、地域によって多様な名まえが残されているものもあります。1等星の中で日本ではなかなか見るのが難しいカノーブスなどはその好例で、瀬戸内を中心にユニークな名まえが数多く伝えられています。

●プロフィール
北尾 浩一（きたお・こういち）
1953年、兵庫県生まれ。公益財団法人大阪科学振興協会中之島科学研究所研究員。星の伝承研究室主宰。1978年より星の伝承の調査を開始。「アジアの星の神話・伝説プロジェクト」メンバー。



北尾 浩一

虚空蔵山という山が全国にいっぱいあるわけですが、そこが信仰の聖地になったのは、由来としてその星が落ちたという話が伝わっているからでしょうが、ルーツは、鉱物資源を求めていた修験者たちが開発した土地なのだと思います。

も一つは、それがなぜ民衆に支持されたかという、山岳地帯が分水嶺といいますが、水を得るための非常に重要な場所だったということだと思います。私が前から気になっているのは、星と水についての関係で、例えば七夕は明らかに水神祭祀です。だから星と水というのは密接につながっていると思つています。

○嘉数：鉱物資源を求めるといのは面白い視点ですが、そういう職業の人が信仰を広げる担い手となつていったということでしょうか。

○茨木：そうですね。研究者の間では一致した見方だと思つています。朝鮮半島からやってきた渡来人たちが鉱物資源を求めて…。関東にやって来た経緯もそうです。だから妙見というのも大阪、太子町の妙見寺から勧請されて高崎の引間妙見になり、これが関東の妙見信仰の大もとになったように、関西のほうから来たことは確かです。いきなり関東にそういう信仰がおりてくることはないのです。

○嘉数：こちら、文化の流れが感じられますね。○北尾：月の信仰に関しては月待塔というのは圧倒的に関東に多い。長野県、群馬県など…石仏が多いですね。二十三日の風習自体は九州にもありますが、二十三日塔という形で祭るのは私の知る限り九州では聞きません。あれはぜひとも教えてほしい。今すぐ飛んで行きたいです。

02 ■秋の星空は春の星空

○嘉数…そういった地理的な人の流れ、文化の流れが、星の和名だけでなく、信仰の観点でも見つけられるですね。

さて、歴史や地理といった枠組みで見えてきましたが、今度は、視点を変えて人の生活スタイルを切り口に考えてみたいと思います。その点、和名はまさに生活スタイルそのものから来ていると思うのですが、星の季節感といえますか、これが見えたら秋とか、私たちは今（01講演会日・2022年10月6日）なら、宵空にベガスの四辺形が見えてきたので秋だな、などと星座で季節を感じたりするわけですが、そういったもので、北尾さん何がありますか。

○北尾…昔は旧暦で、暦と実際の季節のずれが大きくなるときもあったので、それを修正しようと思ったら農耕でも漁業でも、星の動きに頼るわけです。それを経験則で理解していたので、例えば星が昇ったり沈んだりするタイミングを目当てにしようとかを配る。沈むときの事例だと、七夕の織女と牽牛と一緒に沈んでいくとき海が荒れてくるとか…。それから、沖縄県の石垣島、竹富島には星見石というものがあって、二期作のタイミングを計るために用いたり…。星の運行は、当時の暦より優れた正確なカレンダーだったので。○嘉数…日々の糧を得るためのカレンダーとしての利用は、切実な問題だったのではないかな。○北尾…ええ。で、そういった利用の面からする

古来より続いた「天の思想」から人々を解放したのが江戸後期の天文学です。

●日本の天文学の歴史を遡ると、ルーツは中国の「天の思想」に行き着きます。天の意思を読み取るのは天子だけが可能で、そもそも空を見上げるのは「畏れ多い事」という思想です。だから、実用的な暦を作る暦学とともに天子が行う国家運営のための星占いが天文として長く受け継がれ、近代以前の天文学は科学と非科学が入り混じったものでした。ところが、江戸期の後半になると、伝統的な暦学の枠内にありながら、西洋の近代科学の知識を取り入れる動きがでてきて、天文占の影響力が低下し、それに伴って「天の思想」も力を失っていきます。一方、庶民は自由な発想で、たとえば七夕などを存分に楽しんでいました。

●プロフィール
嘉数 次人（かず・つぐと）
1965年、大阪府生まれ。大阪市立科学館学芸員。学芸課長。専門は近世日本の天文学を中心とした科学史と科学普及。「アジアの星の神話・伝説プロジェクト」メンバー。



嘉数 次人

星々のキラキラとした瞬きが星の信仰の原点なのかもしれません。

●昔の人々にとっては、空で起こることは、今で言う天文の領域か気象の領域かといった区分はないわけですから、日常的な空の風景の中に、何か突発的な光とか、異常な光といったものが現れると、それはまずは「怖くて恐ろしいもの」と感じられていたはず。稲妻とか虹とか、あるいは流れ星や彗星、皆既日食などがすぐ思い浮かびますね。そして、特に夜空に光る星々に関して言えば、突発的ではなく、むしろ運行自体は規則的でありながら、その一つ一つはキラキラと瞬いて見える。これは、シンチレーションといって大気の影響によるものですが、そのキラキラと瞬く星の明るさの不規則な変化が、星の信仰の起源を考える上で重要だと思えるのです。

●プロフィール
茨木 孝雄（いばらき・たかお）
1950年、埼玉県生まれ。元杉並区立科学教育センター指導員。元国立天文台広報普及員。日本の星の信仰について調査を進める。「アジアの星の神話・伝説プロジェクト」メンバー。



茨木 孝雄

と、ベガスの四辺形は大きすぎて意外に注目されず、それゆえ和名というのはいささか少ないですね、ないことはないけれど…。○嘉数…なるほど、並びは整っているけれど…。○茨木…実用を考えるとそうなるでしょうね。大きいものは目当てには向かない。○北尾…利用価値の点で注目されるのは、比較的小さくて目立つ星たちが多いです。○嘉数…それが星の和名の特徴のひとつですね。○北尾…そうですね。西洋の星座とほぼ同じイメージというものは、帆かけ星のからす座やたいこぼしのかんむり座などに限られてきます。かなり大きな、しし座のイトカケボシやさそり座のうおつりぼしも、かなり似ていますが、例外的なものだと思います。○嘉数…そういう意味では、ずいぶん体系が違う。星座体系というか、見方が違う。○北尾…もともと秋の星座というのは比較的和名が少ない天域です。秋の星座は、春の明け方に東の空に昇るところを目当てにしようとしても、春は霞がかかって星が見えないのです。そういう理由で、むしろ夏の明け方の冬の星座や秋の明け方の春の星座、たとえばからす座などに和名が集中したのではないかなと思います。○嘉数…なるほど…。私たちは3人ともプラネタリウムの仕事の経験があるわけですが、いまま解説席に座って、季節の星座の解説を行うとすると、ベガス座なら、秋の星座と紹介するのは「当たり前」のことですが、これは現代の平均的な都市居住者の生活時間を無意識に想定して、夕方

「文芸にあらわれた星空」を読み解くと日本人の宇宙観の変遷が見えてきます。

●日本人が抱いてきた星空への関心を歴史的な共通スケールで見渡そうとすると、有効な手立てとなるのが「文芸にあらわれた星空の変化」を追うことです。そこから読み取れるのは、大きく4つの時代に区分できる変化で、①万葉時代：星空は天皇・朝廷に通じるもので、愛でてうたうには畏れ多い存在。②平安朝から鎌倉時代：星を愛でる歌は水面下で個人的にうたわれ始めた。③室町から江戸時代：文芸が下級武士や町人のもになり俳諧などで星空がよまれ出し、地方では独自の星の和名が広がった。④明治・大正期：西欧文芸の流入、詩歌の革新などで星空は美しくうたう対象へ急速に変化した一と整理できると思います。

●プロフィール
海部 宣男（かいふ・のりお）
1943年、新潟県生まれ。元国立天文台長。国立天文台名誉教授。元国際天文学連合（IAU）会長。「うたの宇宙」に思いを馳せる。「アジアの星の神話・伝説プロジェクト」メンバー。



海部 宣男

から宵にかけて見やすい星座をそのように呼んでいるだけの話で、これが、明け方から生活をはじめめる人たちのことを考えると、季節の星座が逆になるといっわけですね…。

○北尾：はい。たとえば昔の朝の早い漁村だと、今の時季なら、明け方に昇って来る（今私たちが分類している）「春の星座」が彼らの「秋の星座」となります。同様にオリオン座は夏の明け方の東の空によく見えるので、現在の星座の四季分類を当てはめると「夏の星座」となりますね…。そして、かつての日本では、多くの人たちが農村や漁村で生活していたことを考えれば、むしろ今の星座分類は、長い歴史の中でつい最近のものだということになりますね。もともと、教育制度を通して体系化された今の分類が多くの人に浸透していったのは明治以降の話です…。よく漁師さんに、その和名をどうして知ったのか、誰に教えてもらったのかと聞くのです。すると、小さいときから船に乗っていて、年寄りの話が耳に入って自然に覚えた…ということがよくあります。年寄りたちが六連とか、ます星とか、酒ますとか…。それが耳に入ってくる。つまり言葉の習得と一緒にです。そのうちにその星がどういう意味を持つのかわかってくる。教えてもらうということではない。体系化された知識という形ではなくて、生活の中の経験を通して学んでいったのですね。

○茨木：先ほど、北尾さんの職業的な偏りのところでも少し出ていましたが、漁業地域の沿岸部分と農業地域の人たちで、和名の注目度の差についてももう少し詳しく聞かせてもらえませんか。

○北尾：日本で結構多いのは半農半漁です。自給自足で両方やっているところが多くて、漁業を専門にやっているところは少ない。ですが、漁業地域では、和名や伝承のダイナミックな動きや変化を捉えられます。各地の漁師は海を通して交流ができますから、たとえば、瀬戸内海の漁師が北極星の和名や徳蔵の話（●）を東日本のほうへ伝えたり…すると茨城や伊豆半島のほうで伝承が変容して語られるようになる。

その名残として今回の本でも紹介しましたが、能登星という和名があります。これは福井の越前の漁師が能登半島から昇るカペラの和名として伝えられたものですが、それがそっくり北海道に分布しているのです。特に積丹半島を能登半島に見立てて同じ方向から昇る星を積丹星と呼ばずに能登星と言っているのですね。漁労に就く人の交流がとても活発だったことを物語るよい例だと思います。

○嘉数：北尾さんにとって「これぞ日本の星」といったものはありますか。

○北尾：見るのも好きだし、そういう質問に答えるのも好きだし、若いときは住む家を探するときの条件がその星が見えるところだったということでもカノーパス。そして、そのたくさんある和名の中で一番好きな名が横着星です。私自身、すごく横着が好きなので…。数年前に八丈島で酔いどれ星というカノーパスの和名を聞いてもっと感激したのですけれども、真面目に東から昇って南中して西に沈んでいく他の星々とは違って、南にちよこつと出たと思つたらすぐ沈んじゃうその横着ぶりには、すごく親近感があります。

03 ■遠くの星空と近くの星空

○嘉数：海部さんから「うた」を切り口に、星と日本人の長い歴史的な係わりをまとめていただいたのですが、中国からもたらされた天の思想というものは、とても大きな破壊力をもったものだったのですね。

○海部：だったと思います。星の見方を一変させてしまった。星と人との関係というのも文化の一つですが、古い時代のウタというのは、やはり宗教、神様というものに重きが置かれ、それが時代がたつにつれて人々の感情の発露に向かっていく。『万葉集』は、感情表現がとても豊かなものです。それがさらに美しさといった意識にまで高められて『古今和歌集』などが成立する。文化自体もそのように時代とともに移るわけですが、その中に星も取り込まれていったということなのでしょう。

ただ「星を語るのには畏れ多いこと」だった。天の思想は非常に強いものです。特に貴族にとっては支配者その思想を受け入れたわけですから、逆らえません。仏教の受容でも似たようなところがありますね。だから、天の思想の導入以前の日本人と星との関わりが、どのようなものであったのかということは、慎重に見ないといけないと思います。

○茨木：太陽と月は昔から信仰の対象で、私の祖母は「のさん、へ」と言ってお月さんを持んでいました。太陽は「おてんとさん」として、拝む人はたくさんいますしね。けれども星は…、拝む対象としてはどうなのかな。

○嘉数：やはり太陽と月ですね。

○海部：太陽は光そのものだからね。どんな民族でも太陽を崇拜しなかったことはないし、月も多分そうですね。

○後藤：そうですね。ただ、あくまで一般的な傾向ですが、狩猟採集民はよく星を見ていると思えます。アフリカのカラハリ・サン（旧称・ブッシュマン）とかオーストラリアのアボリジニの人々は星をよく見えていますね。農耕民になると、太陽がより重要になるようです。アメリカ先住民でもホピ族という人たちはトウモロコシの農耕をやっていたのですが、太陽の動きをずっと見て、地平線の目標物や建築と太陽との位置関係によって、種まきや収穫の時期を知り、またそれにあわせて儀礼をやったりしていました。とくに夏至と冬至ラインを一番基本にしています。アメリカ先住民全体で、一番は冬至、次は夏至を認識して儀礼



2018年5月18日には、国立天文台でアジアの星プロジェクトの研究会が開かれ、海部宣男、後藤明尚氏の講演が行われた。続けて、北尾、茨木、嘉数（司会）の三氏と高田裕行（編集担当／国立天文台天文情報センター出版室）が加わったまとめの座談会が開かれた。

などを行う傾向があります。逆に春分や秋分はあまり意識されません。ホビ族に限らず、そういった太陽の動きが、人類が最初に方位や時間を意識するきっかけになったという気がします。

○海部：日本の縄文遺跡の大湯の環状列石も、冬至の日没の方向を明確に捉えていますね。あれは、本格的で珍しい。

○後藤：一方、ホビ族のお隣のナバホ族というのはバッファローをとっている狩猟民ですが、こちらはかなり星の伝説が発達しています。農耕民になるとどうしても太陽のサイクルに依存するが、狩猟民は星にも関心を持つ。彼らは移動するので、特定の地形と太陽の出現点を関係づけることはしません。海洋民はまだ違いですが。

○茨木：ブッシュマンといえはヴァン・デル・ポストという人が書いた本で、星に対して親しみを込めておばさんと呼んで、でも、かなり能力の高い隣人というか、そういうものとして星を捉えているというのを読んで、和名の特徴とも違つし、もちろん、信仰の対象でもない。そういう係わり方も民族によってはあるのだなと感心したことがあります。

○海部：アボリジニもそうですね。星は人なのだと。だから、本当に人として見ている。

○後藤：星座として認識するよりも一個一個の星をそれぞれ動物に見たり、あるいは、暗い星でも直線的な並びを重視するとか、大きく見方が違います。ただ、星座にかなり関心があるのも事実で、アボリジニの場合は、彼らはよく歩いて長距離を移動するのですが、昼間は暑いから夜に移動して

そのための目印として星をよく見たという説があります。砂漠の遊牧民も同じでしょう。またアボリジニで面白いのは、星やその並びではなくて、天の川の暗黒帯の部分、コールサックや銀河の中核部あたりにエミュー座という星座を見たりもしていますね。同様にインカの人も暗黒帯にリヤマ座を作っています。

○北尾：日本にも、星を人と見立てている例はあります。たとえば「星のことを昔は大きなお人、小さなお人と言ったのだよ。あの山の上に大きなお人さんが出ている、そういう言い方をしたのだよ」(岐阜・香田寿男さん)と。また、星のことを「○さん」、たとえば、すばるさんとか、三ツ星さんとか酒樹さんとか、意外にさんをつけるものも多いです。これが鹿児島の方ですと西郷どんのどんをつけます。酒樹どんとかすばいどん…。そういう意味で擬人化というか親しみをこめて、人と仲間的な発想をもつ和名もかつてはかなりあったのではないかと思います。

○後藤：アフリカのピグミーの研究者に聞くと、星と虫を同じ言葉で呼んでいるそうです。彼らは熱帯雨林で生活していて、あまり空は見えない環境にいますので、さすがに別物とは理解しているようですが、同じ名まえで呼んでいるらしい。それと火と星も同じ名まえで呼ぶ民族も少なくありません。おもしろいのは、最近、森林伐採が進んできて、ピグミーの人たちはだんだん星が見えるようになってきて、逆に驚いているらしいと。

○北尾：長野の町の竜の目伝説がそうですね。ぎりぎり地平線の上で光るカノーパスを見ているの

ですが、星と認識せずに竜の目だと…。ほかにカノーパスを狐火と見ている例もある。

○海部：昔の人は星を天に属するとは言いながら、必ずしも地上との区別がはっきりとはしていないかったのでしょう。天の川を海につないでいるし。

○茨木：日本神話でも星と虫火と籠(かまど)の火、その3つは同じなのです。だから、やはりそういうゆらゆらした怪しいさまというか、光の瞬きには共通して感じる何かがあるのかな。ただ、個人的には、単なる光の点にブッシュマンのような親しみを感じるというのはいさぎよいなとも思うけれども、ちょっと理解できないですね。満天の星空の中に立たされたときには、むしろ怖いという感情をもつという人も少なくないですからね。

04 ■感じる星空と物語る星空

○嘉数：ここまで、前回の講演も含めて、畏敬の念、畏れ多さ、親しみ、怪しさ、怖さ、そして時や方位を測るための頼りになる目印など、人が星や星空に抱くさまざまな思いや感じ方の例が出てきましたが、では「美しい」という感覚についてはどうでしょうか。

○茨木：海部さんは、まず『枕草子』を引用して「星は、すばる」の後はいろいろあるけれども、すばるはきれいだと…。でも、あ後は夕づつとか夜這い星とか。

○海部：あれは辞書にあるのを並べて…。

○茨木：並べてあるだけ。だから、もの尽くしの中の1つですね。

星の文化を研究する一領域「天文考古学」の誕生のきっかけは日本の夫婦岩なのです。

●日本の星文化を探求しようと思うと、天文学をベースに考古学や人類学、宗教学、民俗学、歴史学そして文学…などなど、じつに多岐にわたる学問領域を行き来する必要があります。国外ではそのような研究分野のひとつとして天文考古学が盛んですが、その誕生のきっかけに日本は深く関わっています。伊勢にある夫婦岩(■)がそれで、夫婦岩を描いた版画が、『Nature』の初代編集長を務め、後にエジプトやストーンヘンジを研究して近代的な天文考古学の創始者の一人となったノーマン・ロッキヤーの著作に引用されているのです。いわば発祥地のひとつである日本でも、今後この分野の研究の発展が望まれるところです。

●プロフィール
後藤 明 (ごとう・あきら)
1954年、宮城県生まれ。文化人類学者、考古学者。南山大学人文学部教授・同大学人類学研究所長。専攻は海洋人類学および物質文化や言語文化の人類学的研究。「アジアの星の神話・伝説プロジェクト」メンバー。



後藤 明

○高田：あれはもう大フェスティバル。むしろ「楽

みたいなことになる。

しい」お祭り気分ですよね。

○嘉数：それと、ちょうど江戸期の18世紀終わりぐらいに『天文経緯問答和解』という天文の本が出ていまして、中国の星座のことが書いてあるのです。星座というのは帝の星座とかいろいろあるでも、トイレの星座もある。同じ星なのに、一方は帝で、一方はトイレ。そこで著者いわく、「私はトイレの星たちに聞いてみたい。どんな気持ちですかと」。もはやユーモアを感じさせるレベルです。もう一つ、明治になると新しい美意識として「ロマンチック」が入ってくるのですが、それを間接的に後押ししたのが明治政府の施策だったと思っ

クだったもの」がなくなったわけです。そのタイミングで西欧からギリシャ神話のような知識が入ってきて一気に広がった。広がる余地があった。明らかに明治ごろに星や星空についてのイメージが大きく変わった。いろいろな理由があると思いますが、そういった政治的な背景も、ひとつあるのかなと思っています。

明治の改暦があったときに五節句も廃止されたのです。七夕も節句なので、やはり禁止になったのです。つまり、星の恋の物語、織姫・彦星のお祭りを禁止された。今までの「ロマンチック

○高田：そして、そこに嘉数さんのいうようにギリシャ神話が入ってきた。

○海部：物語といるところが、私はまさにポイントだと思う。物語、つまりロマンは小説でしょう。やはり物語があるかないかということとはとても重

○北尾：今、私の世代は今何時といったら時計を見ますね。もっと若い世代は携帯を見る。時計のなかった時代というのは、星を見るのですけれども、その星はロマンではなく時計だった。では、その文字盤は何だったかといったら、向こうの山の大きな木で、その上にあの星が出たから2時だよと。そういう景観による認知が大切だった。しかし、それは時計に取って代わられ、時を知るための和名はなくなっていく。さらに学校教育の方で、天文についての体系的な知識が広まっていく。そうすると、そういう名前の多様性もなくなって、名

重要だった。ところが、今はそういう習慣が私たちから完全に失われて、逆に私たちが星を見るのは夕方、寝る前ぐらいしかなくなった。これは非常に大きな転換ではないですか。だから、前回の講演の時に話に出ていたように、私たちがベガス星座を「秋の星座だ」と言い出したのは、最近のこと。それがいつごろ定着したのか、ちょっと調べてみたいですね。

まえというものが、いわゆる学校で習うものに変わってしまった…。

○北尾：江戸後期の「農民ほど星を詳しく者はなし」という時代の名残が和名であるけれども、もうそういう時代ではなくなってきた。

○海部：言われたように道具としての星、つまり、生活の役に立つという星の名まえは、その生活がなくなったら必要なくなりません。だから、生活の変化というものが、やはり和名を作り出したリ無くしたりしていくわけで、明治以降の生活の変化がもたらしたものは非常に大きい。例えば早い話、どつしたって今の時代、GPSの時代でしょう。星を頼りにする人は誰もいない。何の必要もない

だから、その名まえが当然忘れられてしまふ。教育ということもあるけれども、そこは和名という民衆が作り出す名まえの宿命みたいなところがありますね。

それと、生活スタイルの転換ということでは、明治以降、ランプや電灯が登場して、夜も起きていくようになった。それまでは、早く寝てしまっしかないのだから、すると朝早く起きて仕事を。だから、むしろ夜の星よりも明け方の星のほうが

要なことで、ギリシャ神話が紹介されたことは、星に対する日本人の見方を大きく変えたと思う。しかも、ギリシャ神話は、西洋文化の根っこにある練り上げられた本格的な神話物語ですからね。そんな物語が、星や星座の背景にあるということになると、奥行きがまるで違う。そういう意味で、それを平易な形で世の中に紹介した野尻抱影の業績は大きいのではないですか。

○高田：極端なことをいうと、単に星は暗い空にぱらぱらとランダムに光っているだけで、情報としては非常に簡単でさっぱりしたもので、見る側に、それらを何か意味つける認識の枠組みのようなものがないと関心を持ったり感情移入したりしにくい対象だと思つのです。その枠組みが、たとえば、実用や信仰、あるいは芸術や科学といった形をとって、その時代時代のさまざまな階層や職種の担い手たちによって、ここまで多彩に編みこまれてきたのかなと…。その点、海部さんのご指摘の通り、ギリシャ神話は体系の整った完成度の高い物語として、多くの人に受け入れられやすい優れた素地をもっていて、それが、私たちをぐっと星空に近づけたのは間違いないですね。とはいえ、それは、反面、とても強い影響力を持ってもいたので、旧来の和名と共存を許すものではなかったとも…。

05 ■残る星空と残す星空

○茨木：和名が残っていくか、あるいはどう伝えていくかという問題ですね。

○茨木：北尾さん自身は、残したほうがいいと思っっていますか。残すといっても博物館などで、考古的資料として保存すればいいのか、それとも生活の実際ではさすがに無理としても、ある程度はそういうものを文化的に学校教育の現場でも少し取り上げてみよつ。それぞれの地方の和名をね。そういう活動もしたほうがいいのかどうか。

○北尾：残すことはとても必要だし、現に教科書などでいかり星とか、そういうものは残っているわけですから、教育的な意味で、プラネタリウムなどで残すのはいいけれども、日々の生活の中で、もっと自由に言葉自体が変化して作られていく過程で、昔のものではない新しい現代的な星の名まえというものが出てくるのもあればいいなと思います。本来、民俗文化というのほとんど語り伝えられていって時代とともに変化していくもの。それが固定化されたときには博物館の展示資料になつてしまつので、そういう意味で和名というものを伝えるのだったら、もっと民衆が自由に言葉と

いつもの生み出す、例えばこのプラネタリウムではこういうような新しい名まえをつけましようとか…。真珠星がいい例で、もともとは野尻さんの創作に近いわけですから、歴史的に古くから使われている名まえですと言ってしまったら間違いだけれども、それが民衆に受け入れられて社会に定着したときは、真珠星は1つの文化であり、伝承資料であり、新たな和名になっていくのではないかなと思います。

○海部：しかし、それは残るべき資格がある名まえでないかわからないですね。真珠星はきれいかもしれない。しかし、新しい星座名、和名をつくるつではないかというのは反対ではないけれども、ある種の必然性がないと非常に難しいことです。そしてなにより重要と思うのは、やはり今、こ

これは日本の歴史、文化として教えられ、後世に語り継がれるべきものだということです。それは早い話が、二十一代、勅撰和歌集であり、古今集であるとか、ああいふものと同じなのです。江戸期までの日本の農民、漁民たちが保持してきた文化としてちゃんと捉えて、それを教えるなり保存するなりするべきだと思います。それが、今回のプロジェクトで私たちが目指しているところですね。

○嘉数：新しく作り変えられるという点では、七夕などはそうで、先ほど述べたように明治のときに七夕は禁止されたわけですが、戦後になって、町興しから七夕が復活して、まさしく仙台などの七夕祭りはそのいい例です。で、そういうところから七夕への関心が高まる。それと最近、十三夜も流行り出していて、スーパーマーケットに行ったら十三夜のお団子を買っているのです。あれはたぶんネット時代だからだと思うのですが、昔の十三夜の情報が、改めて社会に広く行き渡っていく…。

○北尾：売り上げも上がるし。

○嘉数：そうですね。形を変えた現世利益かもしれませんが(笑)、商機として利用されることによって、忘れられていた星との結びつきが、少し形は違つたですけども、戻ってくる。伝統的七夕はまさに海部さんの働きかけで国立天文台が社会にアピールして、各地で今行われているわけです。そういうように少し形を変えて、古いものがまた復活することもあるわけですね。

○海部：そういった、きちっと残すべきという観点から、改めて収集された資料みると、やはり星

からでも人の移動が見えてくるということね。これはちゃんと人に星を含めた文化が密着している

ということと、とても重要なものだと思います。今回のプロジェクトが残すべき重要なポイントの一つになるような気がします。それと、もう一つは先ほど話題になっていた季節と活動時間に関係した生活スタイルの切り口ですが、そこをもう少し掘り下げられればいいですね。とくに農漁村では、北尾さんの話では、夕方に沈む星より明け方に昇ってくる星の和名が多い…、というあたり。

○北尾：明け方に昇る方が圧倒的に多いですね。○海部：ですから、それは数値化できます。やはりこういう話でも数値化はすごく大事です。そのデータと、先の話に出た現代の日本人と季節の星空感といったものの関係をもう少しうまく整理すると、その背後にある生活の変化というものが、より明確に見えてくる。

○高田：そうですね。定量的に。

○海部：それと、北尾さんのお好きなカノーパスが、瀬戸内地方ではとてもたくさん和名がつけられていて、場所によって呼び方が変わるというのも興味深い。

○北尾：そうですね。それもずっと連続していく。

○海部：おもしろいですね。それは、自然と社会の、まさに多様性の反映。実際に他の地域に比べて、関西圏や瀬戸内地方で星の和名が多様であるというのは、文化と多様性、その密度の反映といえるでしょう。これまで集められた星の和名の分布は、そういうことを如実に表していると思うので、日本全体の星の和名の分布の調査と分析は、も

っと深めてみたいところですね。

06 ■繋がる星空と離れた星空

○高田：先ほど、七夕復活の話が出ましたが、ここで、ちょっと視点を変えて、七夕のお話そのものについて考えてみてもらえますか。というのは、七夕の話は、よく聞く織姫・彦星の話だけでなく、他にも、アメワカヒコのお話や天人女房のお話があって、大きく分けて3つのパターンがありそうなのですが、なぜ3つもあるのか…。ルーツは同じなのか、それとももともと独立したお話なのか。独立したものだとなれば、同じイメージをなぜ抱くのか…といったところを少し議論できれば…。

○後藤：根っこは同じで、ルーツは、ヨーロッパの方の話だと思います。

○海部：巨木が天と地をつないでいるといった話とは違うのかな…。

○後藤：それは北欧神話で、世界中に同じような話が見られます。

○高田：独立に同じようなモチーフを抱くというケースというのはあるんですね。

○後藤：あると思います。ただ、それは区別が難しいところですよ。どこまで似ているかにもよりますね。例えば、太陽を神に見るなどというのはかなり人類に共通しているので、どのレベルで類似しているのかと言つことを、まず見究めるのが大切です。

○高田：先ほど述べたように天文現象は非常にないです。○海部：これは非常に難しいところですね。共通した事項を見て、同じような発想をするか、しなやかという…。このテーマで、私がおや？と思つたのは、中国星座というのは、見たところほとんど独自ですが、オリオンあたりは明らかにオリオン・オリエントが反映しているということです。三ツ星は参だから、別に中国でもどこでも同じようにイメージすると思いますが、あの下の小三ツ星を伐という。伐というのは短剣です。また『歩天歌』という詩の星座解説があって、あれはみんな天文官になるときは覚えなければいけないのですが、「参の足下に屎沈む」とかある。先ほど嘉数さんがトイレの話をしたけれども、天のトイレの廁・屏(うさぎ座)で、そこに天屎があるということです。足下と言つただから、やはり巨人のイメージを抱いているのです。だから、中国のあの星座ができる段階で既にオリオン・オリエントの影響を受けていたと言つのは、私としては非常におもしろい発見でしたね。

07 ■大きな星空と小さな星空

○茨木：先にも話が出ましたが、必要性の観点から考えれば、大きい星座をつくる必要はないといえそうですが、確か太平洋のどこかにとても大きな星座がありましたよね。

○後藤：ミクロネシアのマーシャル諸島にいるか座というのがあります。カシオペア座をいるかの尻尾にして山羊座の方まで、北半球にある5つ、6

単純で周期的で情報量が少ない分、安定していて、かつ緯度差はありますが、世界的に同じものを見ているので、相互の交流はなくても、そこから独立に同じようなモチーフを発見するという例が天文現象を素材としてあり得るのだしたら、それは天文が持っている文化的な特質として、強調すべき点ではないかと思うのです。

○後藤：定かではないけれど、アフオーダンスはあると思うのです。アフオーダンスというのは、「人間が認識するときに決定するわけではないけれども、そういうように考えさせるような何らかの必然的なものが自然に存在する」という考え方で、たとえば、さそり座を釣り針に見るといのは、釣り針を使っている人なら割と自然に思いつく…。とすると、瀬戸内海の人とポリネシアの人、あと台湾の原住民とか、それはある程度独立発生と考えるてもいいのかなと思うのです。

○高田：そうですね。人間が持っている基本的で原初的な知覚というか認知のしくみ。

○後藤：ただ、釣り針を持っていないかつたら釣り針という発想は湧かないと思うのです。山の方だったら、鉤型の何か、たとえば自在鉤に見るかもしれない。それはその人たちの自然環境とか文化の段階とか道具に何を使っているかなどの条件による。ないものはないかと思いません。ただし一度成立した話が、話だけ伝わるといことはあると思います。サソリ座はサソリのいないところでも知られているように。

○高田：試行錯誤のうちに独立したかもしれない。

○後藤：むしろ、そちらのほうが不思議かもしれない。



つぐらいの西洋の星座を1つの星座に見立てていきますね。あとアポリジニは南半球で、オリオンから牡牛座にかけてと、2、3の星座をカヌーの星座として1つの物語にしています。

○茨木：それは海洋民の生活のための必要性といったものが背景にあるのですか。
○後藤：海の生活を投影しただけであって、特に航海術にそれが絶対必要だとか、そういう話ではないですね。

○海部：それはカヌーなのですね。

○後藤：アポリジニの場合はそうですね。

○海部：やはり水の上に見えるのですか。

○後藤：そうですね。もともと神話が背景にあつて、昔海を渡ってきたときに何か間違いを犯して嵐で死んでしまつて云々という、教訓を語るための星座です。

○海部：なぜこれを聞くかということ、もともと今の西洋星座でも一番大きい星座は、ギリシャ神話の「アルゴ船」だった。南のほうにあつて、それを余り大き過ぎるということで、AGCが今の88星座を決めるときに、4つに分割してしまつたのだと思います。アルゴという巨大な船、それが大海原の水平線に浮かんでいるというのを想像したという点では、これは共通しているなと思います。

○高田：そうですね。広々とした空と海とその水平線の上に船をイメージすると、自然と大きな星座を描いてしまうのかも…。

○北尾：日本で比較的大きいのは北斗七星なのですが、7つの星のうち6星だけが3等星だからか、

α 、 β の2星を除いて、船星があらわれたのです。これはおもしろい現象。

○高田：つまり、暗い星がある場合は分割しやうということでしょうか。

○北尾：ええ、分割しやういから、5つの星の星座にして北斗七星としては見なかったのですね。

○高田：北斗七星だと、ふたつのサイコロの四と三の目に見立てた四三の星もありますね。単純に暗いだけでなく、他の星の図象的な配置の影響も受けていそうな気がしますね。それと、明るい星が必ずしも重要でなくて、並びの方が大切という例もありますよね。

○後藤：ミクロネシアのキリバス諸島にある航海石の調査をもとに、スターラインの仮説をつくったことがあります。そのとき私たちはすぐに明るい1等星や2等星を選んでスターラインを作つたのです。実際にハワイのホクレア号という復元型航海カヌーでインド洋を航海した航海士の方に聞くと、じつは並びが大事で、意外と暗いマイナーな星も使うのだよと言われて、実践の知識はやはり違つなと思えました。先にもいいましたが、アポリジニも明るさよりも並びを重視したといわれています。

○嘉数：先ほどの海部さんの中国の星座形成にオリエントのオリオン座が影響していたという指摘ですが、中国の星座でもう一つ同じような例があつて、おおいぬ座の領域もそうなのです。シリウスは天狼、つまりオオカミで、その横に市場があつて、鳥がいて、その鳥をオオカミが狙うために弓矢があるという。一方、メソポタミアではシリ

○茨木：南十字の場合は、あれはキリスト教と関係ない人たちから見たら、真ん中に星がないから十字とは見ないのではないですか。

○海部：見ないですね。後藤さんが出してくださつた例ですね。

○後藤：モンガラカワハギ座という魚の星座ですね。

○高田：キリスト教の影響で南十字座が新設されてしまつたので、ケンタウルス座がとも形の悪い星座になつてしまつて…。南十字ができる前の本当のケンタウルスは4本の足首のところのそれぞれ1等星が4つ輝くというすばらしい星座なのに…。ケンタウルスが可哀想です。

○海部：AGCに提案したらどうですか。

○高田：「ぜひ、復活させてください」と(笑)。今の88星座にも、本当にきれいな並びのものがありませんよね。しし座はよく形が整っているし、おおくま座は意外と立体的にできていて…ケンタウルスも、南十字を戻せば形も4本の足に遠近がついてちゃんと立体的に見えるようになっていて、ステキ…。ギリシャ神話の星座は写実的によく描かれていて、そのへんもたいへんわかりやすいですよ。

○海部：あと、はくちょう座はいいですね。

○高田：確かにすばらしいですね。背景として天の川も込みなところがまた…。あれは真ん中に星があるから、正統な北十字ですね。あと、暗いところで見ると天の川の明るい領域がちょうど白鳥の尾羽のようにも見えます。さらに暗黒帯が、飛んでいるときの白鳥の黒い2本の水かき付きの足

ウスは矢で、近くに弓の星座があるそうで、両者には深い関係があるだろうと、早稲田大学の近藤二郎先生が指摘しておられますね。

○海部：なるほど、私たちが思う以上に昔の人は広く交流をしていたということですね。それは本当に気をつけないといけないところ。確かにオリオンが連れている、あれはシリウスが天狼であるというのも共通している。

○北尾：歳差の関係で平安時代のころは、日本でも南十字が見えていたのですが、八重山の鳩間島のほうではウマヌファと名づけていた。その南にある西表島の上から3つだけ見えている。1つは西表島に隠れているけれども、それをウマヌファと言つのです。八重山の北緯20度ぐらいのところでは、世界的にも多様な名まえが生まれています。あれは小さくまとまっているから、もつと高度が

にも見えなくもな思つていて、アポリジニのエミュー座やインカのリヤマ座の向こうを張つて、天の川の暗いところだけでなく、より明るいところも星座の構成要素に加えてフルコースで描いてみました…。みたいな楽しさもあります。先ほどから、星空は単純だといつてきましたが、よくよく見るとじつはとても豊かな世界なのかも…。その点では、いちばん最初に茨木さんの紹介にあつた「瞬き」も現象としてはとてもおもしろいですね。明るさや配置とは別に、チカチカ、時にはキラキラと瞬く時間的な変化を、人はどう認識するのかという…。不安に思うか、親しみを感じるかどうかは別にして、確かに何か生々しい感じはします。瞬きがないと静かすぎてつまらない。シリウスなどは七色に輝く時があつて本当にきれいですからな。

○茨木：恒星はね。ただ、惑星は瞬かないので、どうでしょうかという。あ、それもまた星空のバリエーションの豊かさのひとつとして面白いのか…。

○海部：とはいえ、瞬く星と瞬かない星があるということこそ日本人が区別していたかという、明治以前ではそういう証拠はないですね。明治になつてどうか、与謝野晶子が初めてそういうことを歌に詠んでいるぐらいなものですね。晶子は鉄幹にとっても惚れていましたからね。瞬いている星と瞬かない星がある。でも、鉄幹はそれがわからないのだから、寂しいと…。そんな晶子の豊かな感受性と「うた心」の奥底には、一〇〇〇〇年にわたる日本人の星々への想いが幾重にも折り重なっているようにも思えますね。★

○北尾：1つ足りないけれども、周辺の星を1つ加えると7つになるから…。